

1

説明的文章

◆指導ページ P.2～5◆

【指導のポイント】

- ★接続語の働きに注意させ、文章の内容をつかませる。
- ★指示語の指す内容を的確に捉えさせる。
- ★筆者の意見と具体例を区別させる。

問題番号	ページ	演習問題	指導内容・留意事項など
(P5)	(2)	(1)	設問の「たくさんさんの名前を知ることによる」の同意表現「物の名前を多く知っているならば」に着目させ、それに続く部分から捉えさせる。 (A) 直後の「これは」に続く部分で理由を述べている。二十五字以内の制限があるので、より適切な箇所をしばって抜き出させることを指導する。 (B) 6行目の「一つ一つの物の名前」の直後に「ではなくて」とあることに着目させる。その直後の「似た物の集まりにつけられた名前」が当てはまる。 (3) 空欄にあてはめて文意が通るかどうかを確かめさせる。 A 空欄の前と後では逆のことを述べているということを理解させる。 B 空欄の後で述べられているのは、「物に、どのような名前をつけてよぶかは、わたしたちの生活や態度に関係しています」の例であることを理解させる。 (4) 25～35行目で、日本人とヨーロッパ人の名前のつけ方のちがいで説明されている。この中より、四字で解答できる最適な言葉を答える。 (5) 直後の「八百屋さんは、なにをあげたらいいのかわからない」理由を読み取らせる。「このときには……もつとこまかい分類の名前でよばなければなりません」「そのときどきの目的や……名前のよび方やつけ方をしています」から捉えさせる。 (6) 「このようにして」より、最終段落で文章全体のまとめをしているということをつかませる。文の穴うめをする際に前後との接続にも注意することを指導する。

重要語句

○漁夫⇨漁業に従事している男性。漁師のこと。 ex.漁夫の利
 ○分類⇨ある基準にしたがって、物事を似たものどうしにまとめて分けること。

2

古典

◆指導ページ P.6～9◆

【指導のポイント】

- ★歴史的かなづかいのきまりを覚えさせる。
- ★省略された主語や、会話を的確に捉えさせる。
- ★現代語訳と対照しながら、文脈のつかみ方を指導する。

問題番号	ページ	演習問題	指導内容・留意事項など
(P9)	(3)	(1)	「整理しよう」[]より、語頭と助詞以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」と直すことを理解させる。 「思はざれば」の意味「自分ひとりで静かに考えることをしなれば」の後の部分と対応している。 (2) あやふしは、現代語の「危うし」として今でも名残がある。古語の中には、今でも使われ続けているものがあることに触れるとよい。 (3) (4) (解説)をよく読ませて、文のいいたいことをつかませる。師について勉強したり、書を読んだりしても、自分ひとりで静かに考えないと意味がない [か] 考えるだけで、先人の言に学んだり、他人に問うたりして広く学ぶことがなければひとりよがりになる。 このように整理してから考えさせるとよい。 「整理しよう」[]より、「は↓わ」、「ゑ↓え」、「かう↓こう」であることを確認させる。 (2) 「かれ」は犬が「取らん」としているものである。「肉」だけでは設問の趣旨にそぐわないため、1～2行目の「水に映りて大きに見えるければ」が肉の影であることを理解させる。 (3) 「そのごとく」は「そのように」の意で、この語より前の前半部分で具体例、後半部分ではそのことから得られた教訓が述べられている。 (4) 後半部分から作者の主張を読み取る。この物語はイソップ物語の翻訳であることを説明すれば、古文に興味を持たせる一助となる。 「うちいではべりぬるぞ」の後で姫が自分の身の上話をしていることを理解させる。 主語(動作主)を捉えながら読むくせをつけさせる。(注)もしつかり活用して読んでいくことを教える。 おのが身は、この国の人にもあらず、 <u>月の都</u> の人なり = <u>かのもの国</u> より を理解させる。 「この春より」の直前「思し嘆かむが悲しきこと」に注目させ、その前の部分からとらえさせる。 「まさに許さんや」に注目させ、翁の言っていることを理解させる。

3

文学的文章

◆指導ページ P.10～13◆

【指導のポイント】

- ★登場人物の行動や様子を捉えさせる。
- ★人物の心情を読み取らせ、そのときの気持ちを想像させる。
- ★場面の様子を的確に捉えさせる。

問題番号	ページ	演習問題	指導内容・留意事項など
(P12)	(1)	(1)	「二続きの三文」という指示も解答を導くヒントとなる。昇の様子が一続きで描かれている箇所を指摘する。3行後からの三文が該当する。 ここで改めて数馬Ⅱ兄、昇Ⅱ弟、ということを確認させ、空欄の前後の表現から兄弟のやりとりの場面を整理させる。 A 直後の「数馬は技を掛けながら言った」より、技の名前が入っているウが当てはまる。 B 直後の「数馬は見下すようにして言った」ことより、優位に立っている数馬が昇に言った言葉であることがわかる。 C 直前の「数馬の力がすつと抜け……倒れた」や、直後の「数馬は倒れたままの恰好で言った」より、負けてしまった数馬が昇に言った言葉である。 「意表をつく」「隙をつく」「不意を打つ」などの同義語を理解させておく。
(P13)	(3)	(3)	④ 理由を説明することが求められているため、「……から」「……ため」という文末にできるように指導する。また、理由とあわせて、このときの場面や心情も理解させる。 ⑤ 昇：両手をめちやくちやに振り下した 涙があふれていた ↔ 数馬：振り下す昇の両手を押さえた 笑いながら ↔ 傍線部の前後で、昇の心情が変化していることを理解させる。それまでは「狂ったように兄の肩口に噛みつい」ていた昇が、くすぐられて「笑いこぼげ」、傍線部の後には「兄と並んで寝そべって」いる。昇が落ち着いてきているので、ウが正答となる。
	(4)	(4)	⑤にも関連する問い。兄に対する気づかいが見られるのは、昇が落ち着いてからの傍線部④以降である。この中から、昇が数馬を気づかっている行動を答えさせる。
	(5)	(5)	文学的文章において、時間の経過を示す表現は、直接的な表現以外にも、太陽の位置などの情景描写が用いられることがあることを指導する。
	(6)	(6)	
	(7)	(7)	

4

詩・実用文

◆指導ページ P.14～17◆

【指導のポイント】

- ★詩の種類を覚えさせる。
- ★表現技法とその効果を理解させる。
- ★日常生活において使われる表現に着目させる。

問題番号	ページ	演習問題	指導内容・留意事項など
(P16)	(1)	(1)	文末の表現に注目させる。1・2行目は「……った」、8・9行目は「おくれ」となっていることに気づかせる。また、3～7行目については一続きの内容となっている。 詩などに多い「……のように」というたとえの表現に注目させる。「いっぱい夢」を銅貨のようににぎりしめていることを理解させる。また、「にぎりしめて」という表現から、「大事なものを持っている」ことを表現していることを理解させる。
	(2)	(2)	題名の「卒業」や、1行目の「書かねばならなかった」という表現に注目させる。また、「新しい」とあるため、この「雑記帳」はこれからの未来に向けたものを示していることを捉えさせる。 この詩は「少年期への別れ」「過去の回想」「未来へ」という三つの内容に区切られる。問われているのは「未来へ」の説明に該当するため、8・9行目に注目させる。末尾の「おくれ」という表現から、選択肢の中で最適なものはウの「願い」である。
	(3)	(3)	「整理しよう」の□を確認させ、詩の種類(用語・形式・内容)について知識を定着させる。
	(4)	(4)	第一連で、「小さな心」をのびのびと解放しようとしていることに注目させる。
	(5)	(5)	「かえしてくれる」に注目させ、海に対する感謝の気持ちを捉えさせる。
	(6)	(6)	筆者が連の前後を入れ替えたのは、動作を表す表現を最初に並べたてたことを目的としている。そのことよって自然にかえりたがっている心が生き生きと表現されている。前後を入れ替えて朗読させ、詩の印象を比べさせてみるのもよい。
	(7)	(7)	まず「先生の話」を簡条書きにして、内容を整理させる。 「……いてください」に続くのにふさわしい形でまとめさせる。 簡条書きにした「先生の話」と「お知らせ」の内容を対比させ、どの内容が抜けているのかを理解させる。また、それがどの項目に当てはまるかを考えさせる。